

なまけ病の全快

(昭和二十九年三月二日)

「心配する心で信心をせよ」

このみ教えは、一口に言えばわかりきったようでありながら、その実、なか／＼ご意味が深うございます。私は昨日から、

「心配する心で信心をせよとはどういうご神意ですか、わからせて頂きとうございます」と、一心にお願いさせて頂いておるのですが、「つまらぬ事は一切思わぬ。善い事ばかりを一心に思わせて頂いて、その善い事が永く続けさせて頂けるように、心くばりすること」これが「心配する心で信心をせよ」だと思わせて頂きました。

昨日もお結界にお礼に参られたご婦人ですが、とても上品な優しいお婆さんになっておられましたので、しげ／＼とお顔をながめながら、その昔を思い浮べ、まことに感慨無量でした。

「あなたはお幾つになられました」

「先生、六十八です」

「そうですか、結構になられましたなあ、どうぞ、お元気で長生きさせて頂かれますよう」

こう申上げて「ああ長い、苦しい道であったが、本当に結構になられたなあ」と、しみじみ有難く思いました。

この教会（昭和二年十一月十一日旧広前建築完成）が建った直後のことでしたが、このお方は初めて参拝せられました。ですから、もうかれこれ三十年近くになります。六十八歳のお方が、三十年昔のことですから、三十七、八の働き盛りのお年ごろでした。そのころ、それはく／＼大きな悩みを持っておられました。

「こんなかい性なしの主人と暮らしておってはつまらん」という不平不満でいっぱいでした。そこで、実家や親戚の人々は、だれもが、

「そんな主人とは別れてしまえ。帰って来い。子供の面倒も見てやろう。お前の行末も心配してやろう。しかし、その主人と一緒にいる限りは、ビター文もよう出さん。そんなかい性なしの主人と暮らしていたのでは、いつまでたっても、幸せにはなれん」と、こんなに言われておりました。

そのご主人は、どういうわけか仕事に恵まれず、自分が、ここと思って勤められた所は、そこが倒産してしまう。また、向うが「あなたなら是非来て下さい。生活の保証は十分いたしましよ」と力を入れて下さる所は、自分の方から何が気に入らぬのか止めてしまおうというようなこと

で、^カ鶺鴒の嘴のくい違い“何をしてもうまくいきません。チグハグばかりで、六年という長い間、一銭の収入もない生活をしておられました。二人の子供さんが、次々亡くなって、たった一人の坊っちゃんが残りました。来る日も来る日も情ない、辛い、苦しい思いをして過ごしておられたのですが、何とか助かる道は無かろうかと、お参りする気になられたのです。

ところが、ある晩の事でした。これから、ご祈念をさせて頂いて、門を閉めようと思っておりました時、髪振り乱して真っ青な顔をして飛びこんで来られましたのが、そのお方です。時計は既に十二時も過ぎていました。

「先生、私は、初めて参りました時に『これから後は、どんなことでも勝手にしてはなりません。必ず言うて来なさい』と聴かせてもらいましたから、夜中おそくではありますが、お届けに来ました」

「どんなことですか」

「私はもう辛抱が出来ません。これから、仲人さんの所へ行って、始末をつけてもらいます。

離縁のお届けに来ました」

と、泣き伏してしまわれました。髪は乱れて、顔は青じみ、すさまじい形相をしておられます。

「かい性なしの主人が、何が気に入らんのか、私の髪をつかんで、引きずりまわし、こんなえら

い目にあわせました。たたかれたり、けられたり、もうとても、辛抱が出来ません」

ああ、気の毒な、無理もない。と思わず眼をつぶってご祈念いたしました。

「生神金光大神さま、天地金乃神さま、どうぞこの人が救われますように。どうすればおかげになりましょうか」

一心にお願いしますと、この人の救われる道を教えて下さいました。

このご主人が長い間、失業して無収入の上、時々、気違いじみた乱暴をされる、これは、まともな人間のすることではありません。

「ご主人は病人なのです。身体の病気ではないが、心の病気です。言うなれば、『なまけ病』『仕事ぎらい』という病気なのです。この病気が治りますようにと、祈って看病するのが本当のご家内です。もしも、主人が胸を病んでおられたとしたら、また中風で半身不随であったとしたら、病気全快まで一心に看護するのが、家内の役です。病気の主人に腹を立てたり、また、働けと言うたりするのは無茶というものです。主人の代りに家内が働いて、主人を養っていくのが当然のことです。そこで『主人の看病が十分に出来ますよう、主人を養うていけるだけの徳と力を私にお与え下さい』と祈っていくのです。そして、それだけの仕事を授けて頂かねばなりません。このことを共々にお願ひ致しますよう。神様をつえに働かせてもらいなさい」

と申しまして、私はこんなお話をしました

あるお医者さんの家で、へいの修繕をするので、板をはずしてみますと、一匹のヤモリが古くぎに突き刺されてピク／＼していました。よく見るとくぎはさびついていますのに、ヤモリは生きています。すると、以前にこのへいの板をうちつけた時に、打ちこまれたヤモリに違いありません。静かにみていると、他の一匹のヤモリが、口にえさをくわえてチョロ／＼出て来まして、動けぬヤモリに食べさせております。これで生きているわけがわかりました。この光景を見ていたその家の炊事婦さんが、突然、ワツと泣き伏して、「私は故郷に病気の主人を放って出て来ました。私は、このヤモリにもおとる恥かしい人間です。早速、お暇をいただきとうございます」と、改心して、帰郷し、病床に伏す主人を心から看病したという昔話です。

「これが夫婦というものです。あなたもどうぞ、ご主人の『なまけ病』という恐ろしい病気が早く全快するよう、また、収入のない時には、あなたが一生懸命働いて、ご主人を養い、子供を学校に通わせることの出来るよう、シツカリ働かせて頂きなさい」と、時のたつのを忘れて話しまして、共々にお問い合わせ頂きました。

その翌日のことです。阿倍野筋に新聞の販売所があります。そこに「集金人募集」の木札がつってありました。飛び込んで行って、頼みますと、「よろしい、雇いましょう」と、早速承諾し

ていただきました。集金の仕事は、朝から晩まで、毎日せねばならぬということはありません。月の五日、十五日、また月末の前後に集金します。その間は裁縫をします。初めの間は、集金日は全然、針を持たなかったのですが、だんだん仕事になれるに従って、あまり疲れぬようになり、集金に出る日は着物を半分縫う、集金に出ない日は一枚仕上げるというように、次第に収入が増えて来ました。またそのころは、住宅が十分にあつた時代でしたから、そのような貧しい生活をしておりましたが、夫婦と子供の三人暮らしで、二階二間、階下三間という間取りの家に住んでおられましたから、二階を他人に貸すお願いをされますと、有難いことに、一人暮らしの会社員の方が借りて下されました。しかもその方がいつも出張がちで、たまに家に帰って来られるというような面倒のかからぬ人です。独身の事ですから、留守中に汚れ物をせんたくしておきますと、家賃以外にお礼を下さいます。このように集金、裁縫、雑用と、二人前、三人前の働きをさせて頂きましたので、幾月も滞っていた家賃も支払えるようになり、借金も返済し、だん／＼信心の程度も進むようになり、主人の看病も快く出来るようになられました。今まででしたら、

「私ばかり働かせておいて」と恐ろしい剣幕で主人の胸に短刀を突きつけるような気持でございましたから、主人の病気はますます／＼悪くなったのですが、

「結構なことだ。病人にもいろ／＼あつて、手足も動かぬ、口も利けぬ、というような病人も

ある。そんな時には、私が働くどころではない。朝から晩まで傍につききりで、大小便の世話もせねばならぬ。お茶一杯でも飲ませてあげねばならぬ。何もかもしてあげねばならぬのに、一人で便所に行って下さる。一人で食事もして下さる。なんと有難いことではないか」と思えるようになり、苦しみの中から、お礼が申せるようになられました。更にまた「主人としても、毎日々々さぞ心で苦しんでおられることであろう」と思い、「どうぞこれを持って、一ぺんお芝居でも見にいかれたらどうですか」と、お小遣いの一つも上げられるような良い心にかわられました。そうしますと、ご主人の病気がだん／＼快方に向って来ました。

夏の暑い／＼日、汗ダク／＼になって、「さあ、帰ったらお掃除もせねばならぬ。行水の湯も沸かして、早く主人に入ってもらわねばならぬ」と、あれやこれや心づもりしながら帰って来ますと、門口に水がまいてあります。お掃除も出来ています。お庭に打水しながら、主人の顔がニコ／＼しています。

「もう行水の湯も沸いてるぜ」

何と有難いことではありませんか。

「すみません。もっと早う帰ろうと思っていましたのに、本当にすみません」

と、心からお礼の言えるようになりました。お互いに心と心とが融け合って来たのです。

朝参りから帰りますと、家がきれいに片付いていて、朝食の支度が出来ているという具合に、だん／＼主人の「なまけ病」が全快していきました。そして、今度は自ら職を探して来られ、何をしても三日坊主であったその人が、続いて仕事にいつて下さるようになりました。ある時、阿倍野橋の近くを元気なお姿で歩いておられるそのご主人に会いました。奥さんの話によりますと、

「主人はいつも上町線に乗りません。『少い月給で乗っておつたらもつたいたい』と、どんな日でも乗らないんです」

そんな有難い心に変られました。そして夫婦ともに働かれるようになりまして、なんと、今では二、三軒の借家も持ち、自分の家に住めるようになり、「この間は、芦原温泉にいきました」

「今日から白浜にいけます」というような結構なご夫婦になられたのです。

今ごろではしみ／＼と「先生、夫婦というものはよいものですねえ」と、こんなことが言えるような有難いことになっておられます。共白髪で、屈託のない喜びにみちみちたシャンとしたお年寄になっておられます。

「心配する心で信心をせよ」というみ教えは本当に有難いですねえ。

主人を憎む心で、いつもいま／＼しい思ひばかりして、あちらこちらと、親戚知人の所を歩きまわり、不平不足ばかり並べ立て、不安とあせりの生活を送っておられたその人が、信心の道に

入らせて頂かれて、そんなむだな生活状態から、心機一転して

「どうぞ、主人の看病が十分に出来ますように」と真心から祈られるようになられました。そこからこの有難いおかげの世界が開かれたのです。

「この会社はボロ会社だ。課長はこの私をきらっている。毎日ならみつけている。どこか、もつとよい所はなからうか」

これでは助かりません。ボロ会社なら、一人々々が二人前も三人前も能率をあげればよい。会社が発展すれば自分も結構になります。上役にも部下にも、好かれるのもきらわれるのも、皆、その身、その人の心から。好かれる道、きらわれる道、どちらをとるかは皆、自分の心次第です。商売をする人が、「この店はどうも場所が悪い」と、一日中口癖のように不平不足を並べ立てて、自ら繁昌せぬ原因をつくっているのは、信心のない情ない姿です。

店を拝み、商品を拝み、「結構な商売をさせていただいて有難い」と、喜んで商売に打込んでいきますと、どんな裏通りでも、立ちいくようになります。

「心配する心で信心をせよ」

このみ教えの深いご神意をよくよく悟らせて頂き、一段とお徳を頂いていきたいと思えます。